



イラスト／平澤朋子

わたしの原風景

16

今森光彦

いまもり
みつひこ／写真家・切り絵作家

私の作品集には、田んぼや雑木林などの風景がたくさん登場する。中でも柵田はとくに多いのではないだろうか。そんなこともあって「今森さんの原風景はのどかな田園ですね」とよく言われる。しかし、実際に日本の柵田を見たのは二十歳を過ぎてからで、最初に出会ったのはインドネシアの旅のことだ。柵田というのは私にとって、日本だけではなくより広いアジアの風景として脳裏に刻まれているのである。

では、自分にとっての本当の原風景とは何かと言えば、子どものころに眺めていた小さな空間に違いない。その空間とは、自宅の中庭だ。私の家は滋賀県大津市の中心市街にあった。家々はすべて町家造りで、ベンガラ色の軒先や焼板の塀などが連なっていた。昔の大津はまさに小京都だった。細長い自宅の敷地は、母屋と離れに分かれていてその間は渡り廊下でつながっている。その廊下に沿って中庭があった。私の祖父は石がたいへん好きだったらしく石灯籠などを自分で刻んでいたらしい。庭はしっかりした石の土台で盛り上がり、その隙間に土がすき込まれ、木々が植えてあった。母屋の縁側からの眺めを正面としてつくられていて、背後に行くほど背丈の高い木が配置してあった。石積みの間からはサツキが顔を出し、奥にはアオキが青々と葉を茂らせていた。木々の中から見え隠れするように祖父がつくった石灯籠があったし、奥山を思わせる岩がそそり立っていた。子どもの頃は何気なく見ていたのだけれど、大人になって思い出すとかなりうまくできていた庭のように思う。私は毎日この庭を見ながら、いつも遊んでいた神社の森や山裾につづく農道をイメージして季節感を楽しんでいたように思う。

庭を眺めているという、閉鎖的な空間にこもっているとされるかもしれないが、実は逆で、そこには家の外よりもっと広々とした心の世界がひろがっているのである。庭というのは想像力の窓で、そんな原風景をもっているのは幸せなことだと思っている。